

7/7 西本(22)
支えるには
 九州豪雨

■ 5 ■

切りそろえられた流木が、2層ほどの高さに積み上げられ、堤防の道路沿いに壁を築いていた。表面は白っぽく乾いており、そばを車がスピードを上げて通り過ぎる。昨年7月の九州豪雨を想像させる傷痕は、ほかに見当たらなかった。

「(人の目に触れる場所では)もうここくらいしか豪雨の跡は残っていないんです」
 1日、朝倉市田中周辺の筑後川の堤防で、約20人が参加した視察ツアーの案内役を買って出た朝倉市杷木久喜宮の製材所社長、杉岡世邦さん(49)は、流木の根っこを見つめた。高度経済成長期の昭和30年代、谷を中心に植えられたスギが多く流失した。「根を張らないスギだったから被害が拡大したと言われるが、連つスギが立った状態で根こそぎ流した雨がすごかったんだ。そういう事実も伝えたい」。

記憶共有「わがごと」に

視察ツアー

参加者は、校舎や体育館が濁流にのまれた松末小など6カ所ほどを回った。
 視察ツアーのコーディネーターを務めた、彫刻家で九州

大大学院准教授の知足美加子さん(52)は、朝倉の山と関連が深い英彦山の山伏の子孫。「どれだけひどかったかを見聞きするだけでなく、これから自分ができるかを考えよう」と何度も呼び掛けた。被害の実態を記憶にとどめた上で、地域の未来である子どもたちが「ここに住み続けよう」「10年後に戻ってこよう」と思える環境をつくるのが大切だという。知足さんは10月にも、続編イベントを開く

予定だ。
 参加者から「考えるきつかけになった。来てよかった」との声があるように、被災地を見て回ることは、行動を起こす第一歩になる。東峰村では元村職員の小野豊徳さん(53)が視察ガイドを請け負う。濁流が襲ったJR筑前岩屋駅、工房や寮が被災した小石原焼の窯元、古い家が流失した大行司地区…。目を見張る参加者から、村への支援金を託されることもあるという。
 6月末、朝倉市杷木池田であった復興関連イベント。1995年の阪神大震災の被災者と呼ばれた兵庫県玉塚市の大阪大特任研究員、阪上未紀さん(32)は、6月中旬の大阪府北部地震も体験した。



流木を前に九州豪雨の話をする知足美加子さん(左から2人目)。左端は杉岡世邦さん

「ぐらっと揺れた時、23年前のあの怖さがよみがえったが、日常生活で阪神大震災のことは話題に上らない。完全に忘れていた」。当時小3。当時の記憶がまだある最も若い世代として今、思う。「記憶を社会で共有していかないといけない。いつどこで起きるか分からないんだから」
 (飯田崇雄)
 〓おわり

風化防止につなげる主な活動

団体	活動	連絡先
九州大ソーシャルアートラボ	朝倉市黒川を中心にした復興プロジェクト。シンポジウムやワークショップ	092 (553) 4552
東峰村ツーリズム協会	被災地視察のガイド	http://toho.main.jp
建設コンサルタンツ協会九州支部	被災写真の収集	092 (434) 4340